

Glocal Tenri



9

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.12 No.9 September 2011

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
安全・危険を冷静に・・・
／深谷忠一 1
- ・ 特別寄稿
中島秀夫先生のお出直しを悼む
／佐藤浩司 2
- ・ 天理教教理史断章 (69)
その他の文書⑫
／安井幹夫 4
- ・ 天理教海外伝道の資料 (19)
満州伝道関連史料③
／深川治道 6
- ・ 今日の時代における宗教批判の克服学 (33)
「幸せが獺犬のように追いかけてくる」
／金子 昭 7
- ・ ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の
民族誌学 (30)
キリスト教のハワイ化
／井上昭洋 8
- ・ 天理スポーツ (16)
天理スポーツ シンポジウム⑥
／難波真理 9
- ・ アメリカ通信 (6)
バークレー留学体験記：Shin Buddhism
の授業風景
／深谷耕治 10
- ・ 図書紹介 (63)
『文化を転位させる アイデンティティ・
伝統・第三世界フェミニズム』
／金子珠理 11
- ・ 平成 23 年度公開教学講座
「現代社会と天理教」(2)
第 4 講：教えに基づく環境保護活動の実
践例
／佐藤孝則 12
- ・ English Summary 13
- ・ おやさと研究所ニュース 14
ブータン出張報告／第 20 回宗教研究会「現代世
界の“死”に見るいのちの危機と宗教の課題(3)」
／京大「災害と宗教」シンポジウムにて研究報告
／福島出張報告／平成 23 年度公開教学講座のお
知らせ

巻頭言

安全・危険を冷静に・・・

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

父のアメリカ伝道庁長赴任に伴い、私の家
族は 1960 年の夏にロサンゼルス市に移住し
ました。そして、家族は 5 年後の 1965 年ま
で当地に居住。私は 1968 年の大学卒業まで
の 8 年間で同市内で過ごしました。

当時は、米ソ両超大国が対峙する冷戦時
代。両国を中心に世界各地で核実験が行われ、
その中でもっとも頻りに核爆発が繰り返さ
れた場所が、ネバダ核実験場 (Nevada Test
Site) でした。この核実験場は、アメリカ内
陸部の不毛な山岳地帯にあります。直線距
離にすれば、私が住んでいた全米第 2 の都市
ロサンゼルスから北東に 350km。そして、そ
の水源のオーエンス・バレーからは 100km 弱。
また、カリフォルニアの穀倉地帯であり、妻
が学生時代の 1965～67 年の 2 年間留学し
ていたフレズノ市から東に 300km に位置し
ています。

この核実験場では、開場された 1951 年か
ら私の家族が移住した 3 年後の 1962 年まで、
150 回以上の大気圏内核実験が実施され、そ
の後、1992 年に包括的核実験禁止条約が締
結されるまでに、200 回もの地下核実験が行
われました。原子雲を伴う“広島型原爆の数
倍の大気圏核爆発”や、大きなクレーターが
できるほどの“地下核爆発”に、数百万人が
毎年何回も晒されたという、今考えると全く
信じられない状況でしたが、しかし、当時の
私たちは、核実験があってもそれを事後の小
さなニュースで知らされるくらいでした。

今では、“ネバダでの大気圏内核実験によ
る汚染地図”などがネット上でも見られます
が、当時はそんな情報の公開は全くなく、事
前の対策や事後の処置など話題にもならず、
私自身も、実験場のすぐ側にある観光地のデ
スバレーに、日本からの客人を幾度も案内し
たりしていました。

あれから半世紀、今回の日本での騒動で、
初めて、自分たちが多量の放射能に被曝して
いたであろう事実気づいたのですが、お陰
で私の家族、また、当時現地で一緒に過ごし
た友人・知人の誰彼にも、放射能汚染の影響
が出たことはありません。父は 94 歳、母は

85 歳の寿命を全うしましたし、私たち夫婦
の間の子供や孫にも異常はありません。1960
年と 63 年に生まれた 2 人の弟は、3 歳と 5
歳までの幼年期を当地で過ごしましたが、彼
らも甲状腺ガンなどになることもなく元気な
中年になっています。

当時の LA と今の福島の状況は、様々な条
件が違うので単純に比較はできないでしょ
う。しかし、放射能に汚染すれば“必ずガン
になるとか遺伝的障害が出る”というのでは
ないことは、私の家族の経験からしても事実
だと思います。

しかるに、今の日本では、放射能に汚染さ
れれば、それがどんなに微量でも危ないと言
わないと世間が許さない。多くのマスコミが、
“ここにも、あそこにも基準値を超えた汚染
が…”と報道するけれども、その基準値がど
のようなものであって、それでどんな危険が
あるのかの詳細はほとんど報じない。そして、
例えば、広島・長崎の原爆後の人体への影響
を長年コツコツと調査してきた学者が、“こ
の程度の汚染なら大丈夫だ”と言っても、“彼
は危険な学者だ”などといって袋だたきにす
る。また、生物学者が、“ハエやマウスの一
様な実験動物とは違い、人間の場合は遺伝子
異常があると受精卵が着床しないなどの防御
機能があり、遺伝的障害は起きないというの
が科学的常識である。”等と言っても全く受
け付けない。

しかるに、一方では、“データがなくても
少しでも可能性があれば危険は排除すべき
だ”などという理屈を押し通す。それで、多
くの人たちが、“なんだか危なそう”“何か問
題があるに違いない”という心証だけで原発・
福島関連の全てを拒否する。そういう何ら根
拠のない偏見が、福島の人々の生活の場や手
段を奪い、心を傷つけてもいるように思うの
です。

早期の原発事故の収束、福島復興を実現
するためには、危険と安全を冷静に判断して、
“これなら安全、こうすれば危険はない”と、
後ろ向きではなく前向きに進むことが、大事
なことだと思う次第です。